

町内会レベルのワークショップの手法は何か

提
言

個々の住民のニーズが把握できる上、
ご近所の助け合いも掘り起こせる
町内会レベルのワークショップを
実践しよう！

登壇者

【進行役】	高橋 望	(公財) さわやか福祉財団
	高橋 誠氏	柏崎市第1層SC
	平野 歌織氏	長野市第2層SC
	久本 一富氏	人吉市第1層SC
	對馬 ひろみ氏	小坂町第1層SC

■ 寄せられた声から

- 良い例をたくさん聞きました。良かったです。
- 地域の課題の合意形成の方法、実際にはどんなふう結論が出るのか。不満は残らないか。

■ 議事要旨 高橋 望

本分科会では、きめ細かな地域ニーズの把握だけでなく、担い手の掘り起こしにも効果が期待できる「町内会レベルでのワークショップ」に焦点を当て、取組事例から有効性や実践手法について議論した。パネルディスカッションでは、ワークショップの円滑な進行のためのファシリテーション技術の解説等よりも、開催実現までのプロセスや住民参加者の具体的な変化を本分科会全体で共有することで、各地での今後の実践に活かしていけることに重点をおいた。

柏崎市からは、町内会単位の助け合い実現に向けて、9町内会で構成される地区全体から町内会単位での話し合いの場を開催していった経緯と、これまで表面化しなかった“声なき声”を把握できるなどの効果が報告された。さらに送迎を実施する等の参加率向上の工夫も述べられた。小坂町からは、全38自治会との個別情報交換会（ワークショップ）の開催プロセスと、「居場所の大幅増加」「見守り支援体制の構築」等の成果が報告された。長野市からは、住民福祉大会でのワークショップ実施の経験を踏まえ「より多くの住民の意見を拾いたい」という小単位で開催した動機が伝えられた。手法として既存の地域福祉懇談会の仕組みにワークショップを組み込むことによってスムーズに実施できたこと、少人数で集まることで発言しやすくなり積極的な話し合いが行えたことが報告された。人吉市からは、「住民が集い・地域を想い・つながる」ための情報共有、認識共有の場として地区毎のワークショップが開催されている様子が報告された。併せて、参加者の多くはいつも同じ顔ぶれになりがちとなる課題も提示された。

4者からの報告で共通しているのは「その後の実践に

つながっていく」というワークショップの効果であった。住民主体で活動が創出されるためには、住民自身が自分事として捉え、「やる気」になる必要があるが、顔の見える範囲での話し合いでは、①和やかな雰囲気ですすい→②身近な人の困りごとを実感する→③自分たちにもできることがある、といった気持ちの段階的变化が見られ、共感が広がっていく様子うかがえた。

小坂町の報告は人口5,050人の町としての取り組みで、長野市は第2層圏域の1つの大豆島地区（人口12,597人）での取り組みであったが、双方とも住民同士の顔が見える範囲（＝自治会レベル）での話し合いの場（＝ワークショップ）を実施することによって、住民自身から「これならできるのではないか」といった自発的な発言が出てきており、ある程度の人口規模がある圏域であっても自治会レベルに分割してワークショップを開催していくことで同様の効果を得られることがわかった。また、この2自治体はワークショップを継続実施していることに特徴があり、回を重ねることで意見が深まり良好な関係性ができていき、「自分の発言で地域を変えていく」と参加者が実感することで相当に場が活性化していくことも確認された。

初めてワークショップを開催する時には地域関係者等に難色を示されるケースも多いが、1度開催してみると、多くの住民がその効果を実感しやすい実態も示され、2巡目以降では初回に参加しなかった人も誘い合わせて参加者が広がっていく等、固定メンバーになりがちという課題に対する1つの対応策にもなっている。

提言は以上の協議からまとめられ、参加者の拍手を持って承認された。

アンケートの結果 参加者概数：90名 回答者数：70名

